ビプロジーが新会社

仮想空間基盤提供 自動運転の安全性評価

BIPROGY（ビプロジー、旧日本ユニシス）は6日、新会社V—Drive Technologies（ブイドライブテクノロジーズ、東京都江東区）を設立し、仮想空間における自動運転車両の安全性評価基盤「DIVP」製品の提供を始めたと発表した。ビプロジーも参加する内閣府「戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）」第2期「自動運転」の研究成果を社会実装。5年間で約50億円の売り上げを目指す。

中央が宮地V—Drive Technologies社長

新会社はビプロジーの100％出資で、同社の宮地寿昌氏が社長に就任した。現在、営業担当の4人が新会社に所属。ビプロジー所属の約20人もエンジニアとして参画する。

DIVPではカメラ、レーダー、LiDAR（ライダー）の認識性能の同時評価が可能。実走行では再現が難しい逆光や雨、雪などのセンサー弱点を再現し、シナリオ作成から結果解析、評価までを効率化できる。三菱プレシジョン（東京都江東区）と業務提携し、クラウド、オンプレミス（自社保有）で提供する。

宮地社長は新会社設立の経緯について「ビプロジーでは自動車のエンジニアリングに取り組んできたが、（自動運転安全性評価という）新領域への挑戦には、専門性の高い技術獲得や社外のステークホルダーとの連携が必要」とした上で、「その中心になることを目指し、あえて切り出した」と述べた。

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社